

福岡城祈念櫓跡

— 福岡城跡第6次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1247集

平成26年3月24日

福岡市教育委員会

序 文

福岡市は、古代から大陸の門戸として発展を遂げており、多くの歴史的遺産を有しています。また、アジア、特に中国・朝鮮半島との対外交渉の接点として我が国の中でも大きな役割を担ってきました。

黒田長政が7年間を要して築城した福岡城は、博多湾に面して東西に鶴翼状の広がりを持つところから、別名「舞鶴城」と呼ばれています。昭和32年に国史跡に指定され、現在では歴史公園として環境整備が進められ舞鶴公園としても市民に親しまれています。

福岡市教育委員会では、これまで公園整備に伴い福岡城跡の発掘調査を進めて参りましたが、今回の発掘調査の目的は福岡県の有形（建造物）文化財に指定されている北九州市所在大正寺に大正6年に払い下げられていた祈念槽が買い戻され復元されることになった事から実施したものです。

大正寺に払い下げられた祈念槽は、その後に観音堂として改築が繰り返され、建物の大きさが、明治時代までの建物に比べて小さくなっていました。そのため発掘調査は、現状の建物規模に合わせた調査対象面積に限られましたので、祈念槽台の全てを調査することができませんでしたが、建物の基礎構造や改築変遷の一部を把握することができました。本書は、その成果について報告するものです。

本書が、市民をはじめ多くの方々が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が昭和58年度の実施した発掘調査報告書である。
- (2) 本書には、福岡城跡第6次調査（祈念槽跡）の成果について収録するものである。
- (3) 発掘調査は、福岡市教育委員会（旧）文化課埋蔵文化財調査係の井澤洋一が担当した。
- (4) 本書に掲載した遺構平面図及び土層図については井澤、谷澤仁が担当した。
- (5) 本書に掲載した遺物の実測図は井澤が行い、拓本は長野千重が行った。
- (6) 本書に掲載した遺構・遺物の製図は、井澤が行った。
- (7) 遺構・遺物写真撮影は、井澤が担当した。
- (8) 本書に用いた福岡城関係絵図については、福岡市博物館に提供いただいた。
- (9) 本書に用いた方位は、磁北である。
- (10) 報告書にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。
- (11) 本書の編集・執筆は井澤が担当した。

遺跡調査番号	8343	遺跡略号	FUE-16
地 番	福岡市中央区城内	分布地図記号	舞鶴60
調査対象面積	36㎡	調査面積	36㎡
調 査 期 間	昭和49年2月1日～昭和50年3月26日		

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
(1) 昭和58年度の発掘調査組織	1
(2) 平成25年度の資料整理組織	1
第2章 立地と歴史的環境	7
1. 立地と槽台景観	7
2. 福岡城の歴史	7
(1) 福岡城の略歴	7
(2) 福岡城の略年表	9
第3章 折念槽跡の調査	13
1. 調査経過	13
(1) これまでの経過	13
(2) 調査区の設定	13
2. 遺構説明	16
(1) 調査区の土層	16
(2) 調査第1区の遺構	23
(3) 調査第2区の遺構	23
(4) 礎石配置	23
3. 遺物説明	29
(1) 瓦類	29
(2) 瓦工人刻印・記号刻印・ヘラ記号	32
第4章 まとめ	47

挿図目次

Fig.1 福岡城跡位置図(縮尺/50,000)	2
Fig.2 福岡城郭配置図(縮尺1/10,000)	3
Fig.3 本丸・二の丸の槽位置図(福岡城内之図)	6
Fig.4 折念槽原位置と建物景観絵図	12
Fig.5 折念槽復元設計図(縮尺1/200)	14
Fig.6 調査第1区土層図(縮尺1/40)	17

Fig.7	祈念槽跡周辺測量図 (縮尺1/200)	18
Fig.8	調査第1・2区遺構平面図 (縮尺1/40)	20
Fig.9	調査第1区遺構断面図 (縮尺1/50)	21
Fig.10	調査第1・2区礎石配置図 (縮尺1/50)	25
Fig.11	調査第2区遺構平面・断面図 (縮尺1/40)	28
Fig.12	瓦類実測図1 (縮尺1/4)	30
Fig.13	瓦類実測図2 (縮尺1/4)	31
Fig.14	瓦類実測図3 (縮尺1/3)	32
Fig.15	瓦類実測図4 (縮尺1/4)	35
Fig.16	瓦類実測図5 (縮尺1/4)	36
Fig.17	瓦類実測図6 (縮尺1/4)	37
Fig.18	瓦刻印拓本1 (縮尺2/3)	39
Fig.19	瓦刻印拓本2 (縮尺2/3)	40

表 目 次

Tab.1	福岡城内本丸・二の丸の槽一覧	6
Tab.2	福岡城の規模	8
Tab.3	祈念槽跡出土瓦計測表	44
Tab.4	祈念槽跡出土刻印瓦一覧表	45

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡城は、別名「舞鶴城」と称した梯郭式の平山城で、昭和32年8月29日に国指定史跡となった。指定面積は48.3haである。昭和23年には「舞鶴公園（総合公園）」として40.4haが都市計画決定されており、共用面積は37.4haを測る。

福岡城跡の所有者は、財務省、法務省、福岡県、福岡市となっているが、城内の大部分は財務省が所有しているため、財務省と福岡市との間に無償借地契約が結ばれ、公園整備が進められている。

昭和32年8月13日に福岡県の有形（建造物）文化財に指定された北九州市所在の大正寺観音堂（福岡城祈念槽）建物は、大正7年に払い下げられた建物で、観音堂として使用されてきたが、改築によって江戸時代の祈念槽の規模と比較して大きく矮小化されている。昭和57年度に福岡市は、大正寺観音堂（祈念槽）を買い戻し、3ヶ年計画で、元の位置に移築復元工事が実施されることとなった。

発掘調査は、移築復元工事に伴うものであったが、槽台全体を調査対象とするものではなく、大正寺の観音堂建物規模に合わせた面積を調査対象としたため、江戸時代当時の祈念槽の規模や基礎構造を把握する事はできなかった。

発掘調査では、槽台の埋没状況や建物礎石の遺存状態、及び立替が行われた痕跡を確認する事ができた他、築城時期の瓦類を検出した。

2. 発掘調査の組織

(1) 昭和58年度の発掘調査組織

調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化部文化課
調査総括	福岡市教育委員会文化部文化課 課長 生田征生 埋蔵文化財第2係長 折尾学
調査担当	埋蔵文化財第2係 井澤洋一
整備担当	文化係長 高橋久徴 担当 高瀬正信（庶務担当） 谷澤仁
調査補助員	谷澤仁
調査協力者	明野隆、海田龍正、合屋龍介、武田秀司、西原達也、有富いつ子、緒方マサヨ、清原ユリ子、後藤ミサヲ、柴田勝子、庄野崎ヒデア子、祇綿チエ子、日野良子、平井和子、藤本三規子、堀川ヒロ子、松尾玲子、宮原邦江、米嶋チズヨ
整理作業	池田洋子、仲前智江子、永井和子、山下仁美

(2) 平成25年度の資料整理組織

整理報告・総括	福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課長 宮井善郎
調査庶務	文化財部埋蔵文化財調査課調査第1係長 常松幹雄
整理・報告担当	埋蔵文化財専門員（嘱託） 井澤洋一
資料整理	技能員 野村俊之 整理作業員 長野千重

発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係者各位にはさまざまなご協力、ご理解を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。



Fig.1 福岡城跡位置図 (縮尺1/50,000)

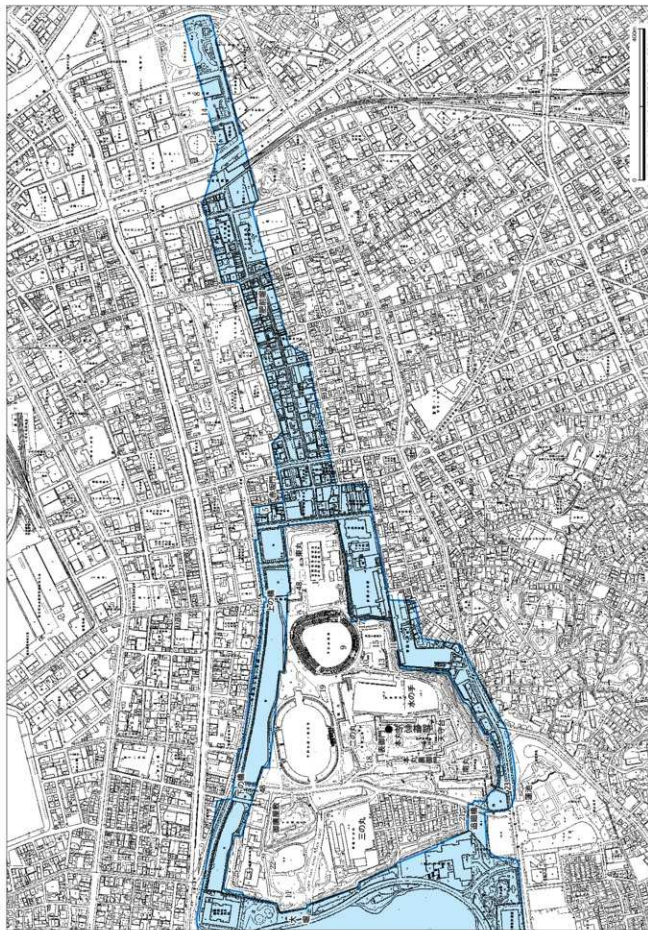
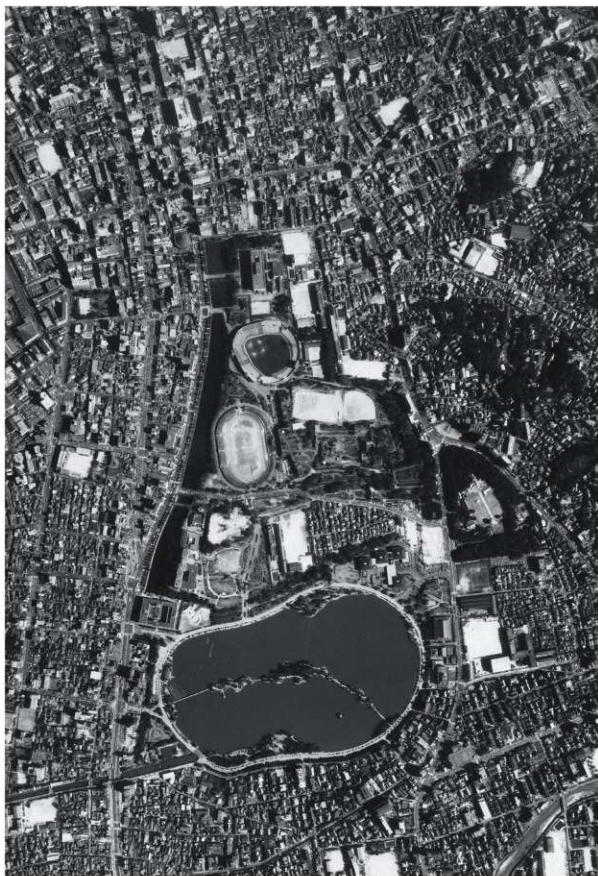


Fig.2 福岡城郭配置図 (縮尺1/10,000)

●は新念徳跡



福同城跡航空写真 (約1/20,000)

中国土地院提供



福博惣絵図（正保城絵図）

※福岡市博物館提供

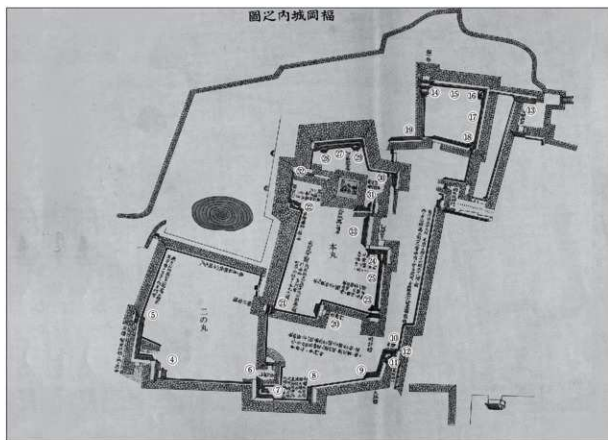


Fig.3 本丸・二の丸の櫓位置図 (福岡城内之図)

Tab.1 福岡城内本丸・二の丸の櫓一覧

区分	櫓番号	櫓名称	区分	櫓番号	櫓名称
二の丸	④	葎櫓	本丸	⑳	表御門櫓
	⑤	炭櫓 (高矢倉)		㉑	祈念櫓
	⑥	洗紙櫓		㉒	月見櫓
	⑦	萬櫓		㉓	時櫓 (時計櫓、時打櫓)
	⑧	松原櫓 (向櫓)		㉔	太鼓櫓 (伊之介櫓、古時打櫓、本丸裏門櫓)
	⑨	大組櫓		㉕	圖所櫓
	⑩	向櫓		㉖	鉄炮櫓
	⑪	松木坂櫓		㉗	武具櫓 (道具櫓、武器櫓)
	⑫	屏風櫓		㉘	東三階櫓 (南櫓)
	⑬	鉄物櫓 (金物櫓、三味線櫓)		㉙	西三階櫓 (南櫓)
	⑭	南三階櫓		㉚	矢櫓
	⑮	平櫓		㉛	天守櫓
	⑯	西角櫓		㉜	天目櫓
	⑰	西平櫓 (多聞櫓)		㉝	長局
	⑱	北角櫓		㉞	名称不明
	㉑	生捕櫓		㉟	名称不明
	㉒	名称不明		㊱	名称不明
	㉓	名称不明		㊲	名称不明
	㉔	名称不明		㊳	名称不明
	㉕	名称不明		㊴	名称不明
㉖	名称不明	㊵	名称不明		
㉗	名称不明	㊶	名称不明		

第2章 立地と歴史的環境

1. 立地と櫓台景観

福岡城は、福岡市中央区に所在している。博多湾を巡る海岸線のほぼ中央部に向かって伸びた独立丘陵の赤坂山の先端に位置している。丘陵上には、古代に筑紫館・鴻臚館が設けられ、平坦地が形成されていた。城郭は慶長6年から7年の歳月を掛けて築城されたと云われる。城の形成は、赤坂山から博多湾へ向かって伸びた赤坂山の尾根を丘尾切断して城南側の堀を造り、北側は丘陵の先端を削り、また谷を埋めて平坦面を造成している。最高所の本丸を中心として東西に広がる梯郭式の独特の城構えになっている。

祈念槽跡は、福岡城跡本丸北東隅の出隅に所在し、標高28mを測る本丸北東隅に在って、二の丸・三の丸が見下ろせる位置にある。祈念槽の槽台は標高25m、槽台底面の規模は、基底部の南北方向は20.70m、槽台天場の規模は、東西14.60m、南北14.70mを測り、平面形は「コの字」形を呈している。

祈念槽建物外観及び構造は、絵図「福岡城本丸之図」によれば、この槽は出隅一杯に建てられた二層二階の建物であるが、祈念槽の南側には一層と二層の建物が付属していることが見て取れる。大正時代に写された軍人の記念撮影の背景にある祈念槽は、二層の建物で、一階外観は下位の約2/3が下見板張りで、上位が漆喰壁になっており、突き上げ戸が付いた格子窓が二ヶ所設けられている。二階は壁の約1/3が板張りで、上位は漆喰壁になっている。窓は花頭窓を中央に寄せて二ヶ所造っている。また、建物の西側には築地塙が繋がっている様子がうかがえる。築地塙下の石垣の天端石直下の五角形状の特徴のある切石（写真★印）であるが、昭和59年度に移築復元した祈念槽の石垣写真と比べるとこの石が随分と西側に離れた位置にあることが判明した。これにより現在の祈念槽が、建物の東西長からみれば1/2程度縮小されていることが判明した。大正寺においての建物改変の著しさを物語っている。

今回移築された大正寺観音堂の建物規模は、梁行2間、桁行3間の単体建物である。

福岡城内は、明治6年の竹槍一揆の後、第14師団管内分営所となり、明治9年に陸軍歩兵第14連隊第3大隊が駐屯し、明治19年以降は、歩兵第24連隊が終戦まで駐屯していたが、昭和20年当時には、本丸には軽重病院が存在し、また戦後は国立病院が昭和38年に三の丸に移転するまで存在していたことから、本丸周辺には病院関係産廃物も散見される。

2. 福岡城の歴史

(1) 略歴

天正14年（1586）から始まった豊臣秀吉の九州征伐により、筑前国には小早川隆景が入国し、新たに名島城を築城する。また、秀吉は同時に朝鮮出兵の兵站基地として、黒田孝高（如水）、石田三成等に荒廃した博多を復興させ、太閤町割を行った。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い後、黒田長政は筑前領主小早川秀秋に代わって、筑前国15郡、五十万余石（後には五十二万余石）を与えられて入国した。長政は当初名島城に入城するが、城が手狭であること、また城下町整備や博多経営に不便であることから、那珂郡警国村福岡の地に新城を築くこととし、慶長6年（1601）にその築造に着手した。新城は、長政自らが設計し、野口佐助一成を普

請奉行として、慶長12年（1607）まで7年を要して完成したと云われる。

城郭の形式は梯郭式の平山城で、城内は天守台・本丸・二の丸・三の丸の4層に分かれ、本丸には本丸御殿を、二の丸には御館、南丸を配する。三の丸の北側正面には家老級の侍屋敷がおかれ、下の橋大手門南側には、如水の隠居地である御鷹屋敷と、二代忠之と三代光之は、それぞれ三の丸に御館を構えるが、光之の御下屋敷は宝暦13年（1763）に焼失している。

城内には潮見櫓、花見櫓をはじめとする47の櫓が設置されていた。また、外郭は城の西側に大きく湾入する草ヶ江の入江を利用して大堀（大濠）とヤナ堀を設け、東側是那珂川を境として楕形門を設けた。内郭外堀から那珂川に通じるには、中堀、そして肥前鍋島氏の普請による肥前堀を開削している。城内から外郭の城下町へ通じる橋は、大手側の堀に2ヶ所（上の橋・下の橋）、南西橋手には追廻橋があった。外郭の南側は赤坂山から伸びる丘陵を切断して堀を設け、北側は湯を埋め立てて城下町をつくった。城下町福岡の由来は、黒田氏の先祖の地である備前国邑久郡福岡に由来するもので、ここに中世以来の国際商業都市であった「博多」に加え、城下町「福岡」が誕生した。

また、豊前小倉藩との境に六端城に元和元年（1615）の一国一城令によって破却されるが、黒田二十四騎と云われた播磨国以来の有力家臣を配置している。寛永9年（1632）、二代忠之が藩主の時に筆頭家老栗山大善との確執による御家騒動（黒田騒動）が発生する。

慶応3年（1867）、第15代将軍徳川慶喜は大政奉還を行い、明治政府が成立した。明治4年（1871）、政府は廃藩置県を実施し、旧筑前国は福岡県に、同年（1876）には小倉県（旧豊前地域）が誕生するが、明治4年福岡藩贖礼事件により、福岡県知事黒田長知は罷免される。

新政府の政策は農民を圧迫するものであったため、各地で一揆が発生し、県内では明治6年（1873）に筑前竹槍一揆が起こった。県庁の所在した福岡城は襲撃を受け、これを契機に、同年に小倉より第十四師団管内分営所が分置され、歩兵第十一大隊の分遣隊が駐屯した。明治19年6月には、陸軍歩兵第二十四連隊が新設され、昭和20年の終戦まで軍隊の駐屯することとなった。

明治40年12月に崇福寺より旧福岡城の花見櫓・潮見櫓の下附申請がなされ、大正7年に本丸表御門・花見櫓・月見櫓（潮見櫓）が崇福寺へ移築され、更に本丸裏門・潮見櫓等が「浜の町」の黒田別邸へ、祈念櫓が大正寺に移築された。

大正14年には、西側の大濠を改修して「大濠公園」が造成され、この大濠公園を更に埋め立てて、昭和2年3月から60日間に亘って「東亜勸業博覧会」が福岡市主催で開催された。

昭和21年に「舞鶴公園」として都市計画決定を受け、昭和32年（1957）8月に国史跡に指定、さらに、昭和57年10月には追加指定を受けた。

Tab. 2 福岡城の規模

範 囲	面 積 (m ²)	備 考
国 指 定 史 跡	482,496	内郭及び北側堀他
内 郭 ①	約413,900	堀の内側のみ
内 郭 ②	約1,100,000	内郭および堀
内郭・中堀・肥前堀	約1,210,000	
外 郭	約2,460,000	北側：博多湾、東側：中堀・肥前堀・那珂川、西側：ヤナ堀
惣 構 え	約17,530,000	北側：博多湾、南側赤坂山、東側：御笠川、西側：室見川

(2) 福岡城の略年表

西暦	年号	内 容
1600年	慶長5年	関ヶ原の戦いで活躍した黒田長政が、徳川家康より筑前52万2416石を与えられて初代黒田藩主になる。
1601年	慶長6年	福岡城の築城がはじまる。
1602年	慶長7年	黒田長政が名島城から福岡城本丸にうつる。
1603年	慶長8年	豊前・筑後と筑前の国境に六端城の築城をはじめる。
1607年	慶長12年	福岡城が完成する。
1615年	元和元年	幕府より藩主の居城以外に出城を持つことを禁止する「一国一城令」が出されたため、豊前・筑後と筑前国境の六端城を破却する。
1620年	元和6年	長政は幕府に対する忠誠を表すため天守閣をこわすように命じる。
1632年	寛永9年	この年「黒田騒動」がおこり、領地を一度取り上げられるが、後にもどされる。
1646年	正保3年	幕府の命令で筑前国と福岡城・城下の地図を提出する。
1671年	寛文11年	三代藩主黒田光之が三ノ丸西北に藩主の御殿をうつす。
1699年	元禄12年	この頃、筑前、福岡城、福岡城下の実測による地図がつけられる。
1763年	宝暦13年	この頃、黒田光之が建てた御下屋敷が焼失する。再建された御下屋敷は焼失前に比べ、小さく質素なものであった。
1812年	文化9年	中堀と肥前堀を石垣に改築する。
1863年	文久3年	異国船に対する警備のため大砲を置く台場を福岡・博多の各所につくる。
1868年	明治元年	明治維新。
1871年	明治7年	7月2日、福岡藩知事黒田長知免官される。7月14日廃藩置県、福岡県庁を城内御下屋敷に置く。(廃城)
1873年	明治6年	6月20日、筑前竹槍一揆。樹形の石塁を乗り越え、内より鎖せる城門を開く。第14師団管内分営所となり、歩兵第11大隊の分遣隊が駐屯。
1876年	明治9年	県庁を城外に移転する。歩兵第14聯隊第3大隊の分遣隊が駐屯。
1886年	明治19年	6月歩兵第24聯隊が編成され城内に駐屯。
1887年	明治20年	那珂川西岸の樹形門以北の石垣及び西中島橋の樹形門を撤去。
1908年	明治41年	崇福寺、弘下げ許可になった花見櫓・汐見櫓2棟の引取に際し、敷石の下附願いを提出する。
1910年	明治43年	福岡市内に電車が開通する。
1916年	大正5年	福岡市浜の町黒田家別邸竣工?
1917年	大正6年	花見櫓・汐見櫓・本丸表御門は崇福寺に、祈念櫓は大正寺に払い下げられる。
1919年	大正7年	武具櫓・本丸裏御門、陸軍省より浜の町の黒田家別邸に払い下げられる。
1925年	大正14年	西側大濠を「大濠公園」として改修する。
1927年	昭和2年	3月～5月、福岡市は、東亜勲業博覧会開催する。
1935年	昭和10年	2月風致地区指定される。
1945年	昭和20年	米占領軍、一時旧福岡城内へ進駐。
1948年	昭和23年	「第3回国民体育大会」開催、平和台陸上競技場の整備。
1957年	昭和32年	8月福岡城、国史跡に指定される。11月「舞鶴公園」として都市計画決定される。
1982年	昭和57年	国史跡追加指定。
2000年	平成12年	8月15日、福岡県指定有形文化財福岡城の「下之橋大手門」が焼失する。



大正寺観音堂（昭和58年2月）



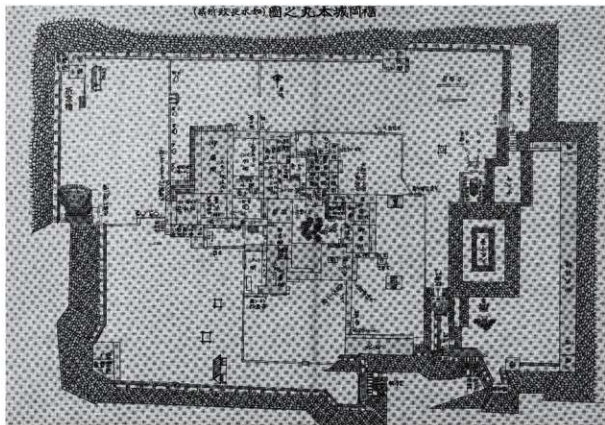
大正寺観音堂（昭和58年2月）



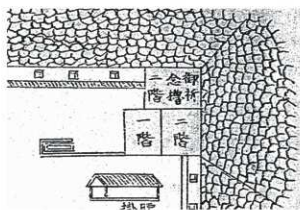
航空写真 福州古城写真

華陸軍兵舎群

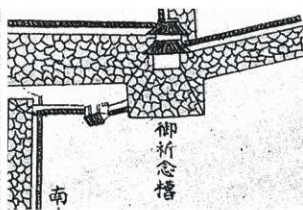
(最新政史和)圖之丸本城岡福



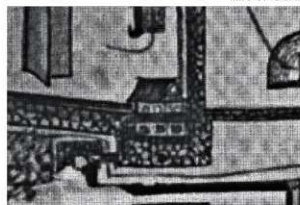
福岡城本丸絵図 (福岡城本丸之図)



(福岡城本丸之図)



(福岡城之図)



(福岡城之絵図)



(福岡第二十四連隊鎮魂記念祭之図)

Fig.4 祈念槽原位置と建物景観絵図

第3章 祈念櫓跡の調査

1. 調査経過

(1) これまでの経過

福岡城内は、陸軍施設の設置や、建物の民間払い下げなどにより、城としての景観が損なわれていたが、昭和32年8月の国史跡の指定、及び、同年11月の「舞鶴公園」の都市計画決定により、公園整備が大きく進展することとなる。昭和40～50年代に城内の学校施設（西日本短期大学、英数学館、福岡大学）の移転と共に公園整備が行なわれ、併せて文化財保存修理も行なわれた。石垣の保存修理（昭和46～53年）、南丸多聞櫓の復元工事（昭和47～49年）、長屋門・名島門の修理（昭和52年）、潮見櫓の補修（昭和52年）、下之橋大手門の補修（昭和57年）が行なわれてきた。祈念櫓の移築復元は、昭和57～59年の三ヶ年計画で行なわれ、初年度は解体移設、最終年度に復元の予定で実施された。

(2) 調査区の設定

前述したように発掘調査に先立って既に旧祈念櫓（大正寺観音堂）移築復元のための部材保存修理場所として覆い屋が組まれており、発掘調査範囲も覆い屋内部に観音堂建物規模に合わせて調査区が設定されており、異論を挟む余地がなかった。昭和58年当時観音堂建物規模は、梁行2間、桁行3間であったので、それに合わせて南北幅約5.5m、東西幅約6.5mを測る約36㎡が調査対象面積となった。これを調査第1区と称する。

調査経過の中で、礎石が西方向、南方向に伸びることが確実となったが、南方向は覆い屋の関係で拡張が難しいことから西方向に一部トレンチを設定して礎石を確認することとした。このトレンチを調査第2区と称する。



祈念櫓復元工事着工前（昭和49年2月）

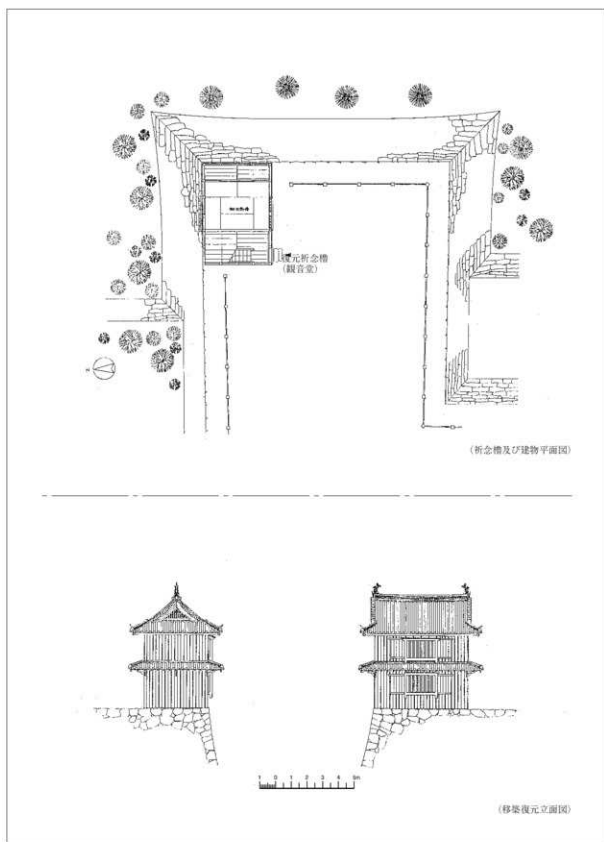


Fig5 祈念槽復元設計図 (1/200)



現状の祈念槽（福岡城内）

※上下写真★印は同一の天端石



陸軍兵士記念撮影（大正時代）※大正7年以前

2. 遺構説明

(1) 調査区の土層

槽台上は、国立病院時代の廃棄物や残土処理場になっていたため石垣面に向かって傾斜した土盛りがなされており、その深さは約70cm～110cmを測る。Fig 6の調査区南壁土層図で観察すると、表土は、碎石層で約10cmの厚さを測る。公園整備に伴って整地された碎石層である。その下層の第2層から第10層までは、石炭や豆炭、試験管やガラス容器などを含む病院関連の産業廃棄物層と成っている。前述したように戦時中は陸軍軽重病院が在り、戦後は国立病院が三の丸に移転する昭和38年まで所在していたことから本丸周囲の槽台などの空き地が廃棄物処理場になっていたものと思われる。

また、南西部の礎石間には水道管が埋設されている。礎石を避けるように曲げて設置しているが、その用途は不明である。給水又は、防火用水に関係するものであろうか。

第11・12層は水平堆積の上層であるが、この層は、祈念槽を北九州市大正寺に移転するために撤去した跡に盛土整地した表土を形成していたものと考えられる。その下層は、水平堆積層序をなし、石垣後背の裏込め石及び礎石の間を埋め、また覆う様な状態を呈していることから大正7年以降に埋め立てられた土層と考えられる。第17層は、細かい頁岩を含む黄褐色粘質土であるが、粘質が強く、この層及び、上面から漆喰の粉末が多量に検出したことや、礎石E3が載っていることからこの層を版築面と考えることができる。版築面には、黄褐色粘質土を用いているが、頁岩の風化土も多く含んでいる。土層面に存在する礎石E3は、若干動いている。第16層は水道管埋設溝の埋土である。



復元された祈念槽外観（西から）

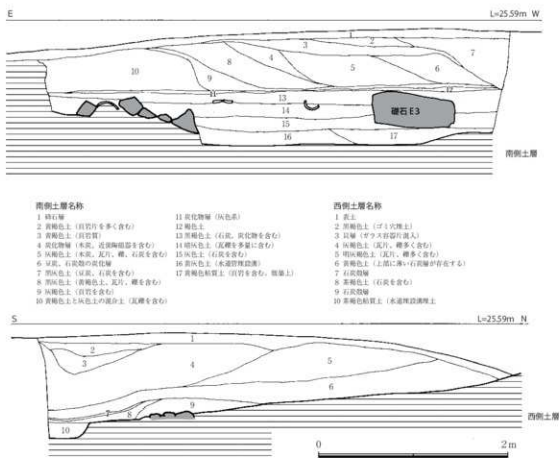


Fig.6 調査第1区土層図 (縮尺1/40)



表込石・版菜面上の覆土 (客土) の状態 (北から)

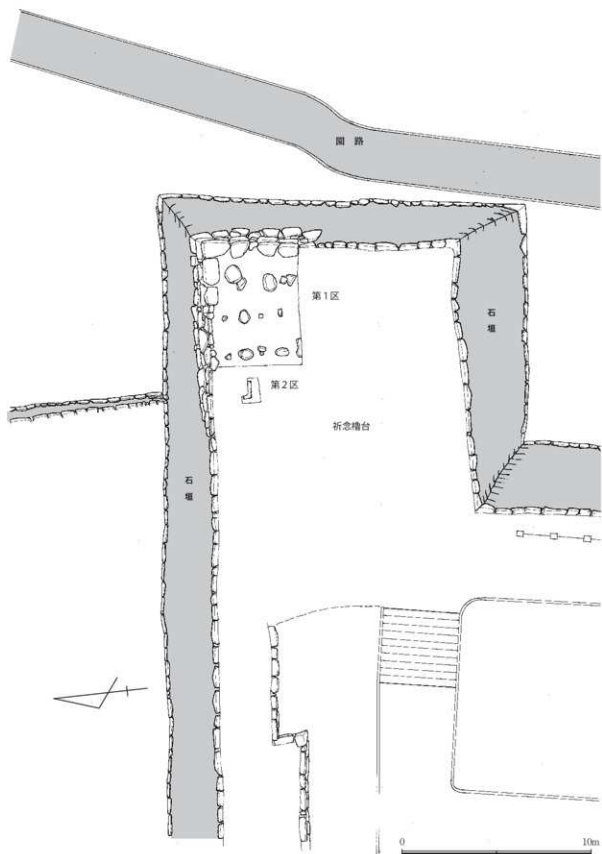


Fig.7 祈念槽跡周辺測量図 (縮尺1/200)



調査第2区南側土層東側
(北から)



調査第1区南側土層西側(北から)

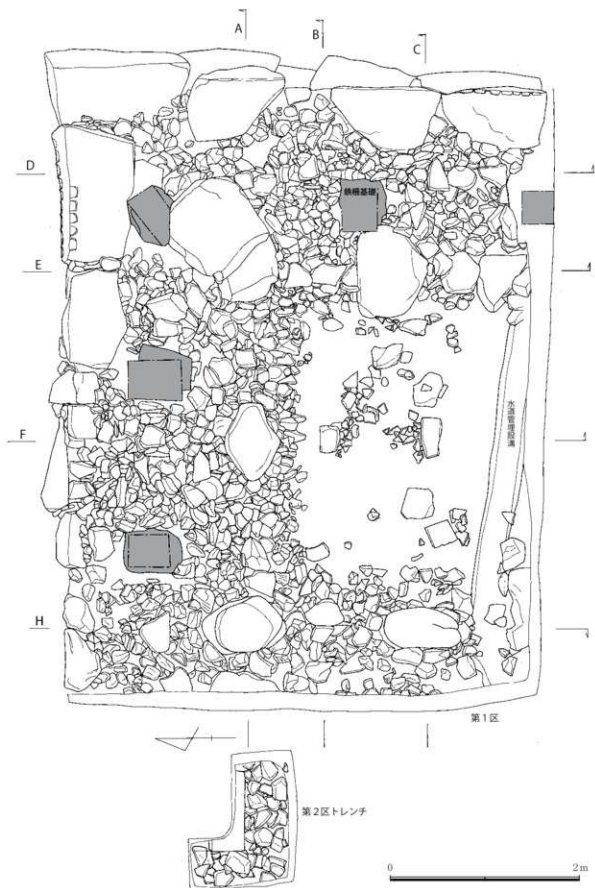


Fig.8 調査第1・2区遺構平面図 (縮尺1/40)

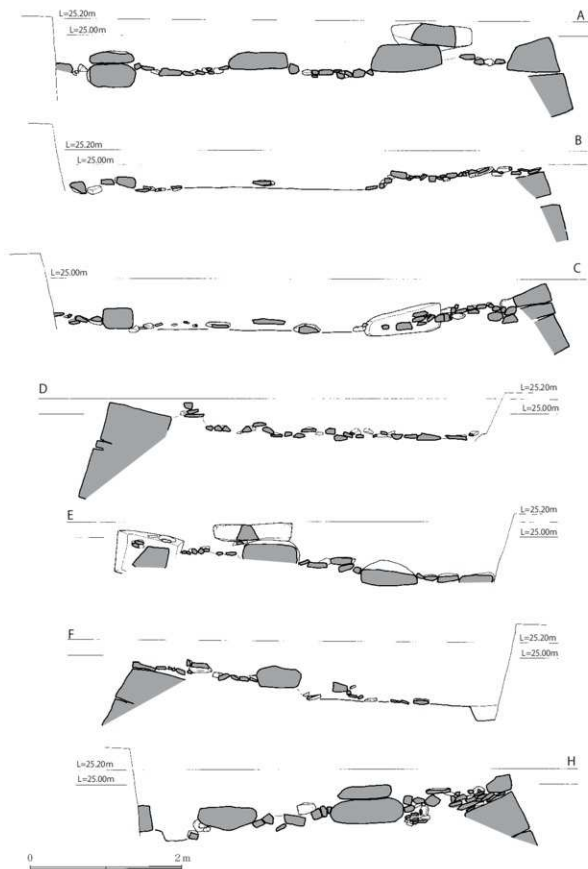


Fig.9 調査第1区遺構断面図(縮尺1/50)



調査第1区全景（西から）



調査第1区全景（東から）

(2) 調査第1区の遺構

発掘調査では、石垣天端から連続する裏込め石及び基盤面を表出させ、礎石を検出する事に努めた。槽台石垣天端の標高は、約25.30mを測る。天端石は、長さ100cm～150cmを測る花崗岩割石の面を揃えて用いており、控えの幅は70cm～80cmである。揃えられた面の角部には、幅約12cmの鑿痕を遺している。槽台石垣の東北隅角はより鋭角に突き出して積んでいる。天端石は、東から北側に遺存しているが、北西側の天端石は欠落している。裏込め石の幅は、石垣面より約250cmを測るが、裏込め石内側の高さは、石垣天端石の高さより約60cmの落差で落ち込む。全て丸みを持った転石を用い、その大きさは拳大から人頭大で、玄武岩を主体にした角石を使用している。

祈念槽の礎石は、6基検出した。大きさは、長さ70～95cm、幅50～70cm、厚さ30cm前後を測る花崗岩の不整形円形を呈した転石を用いている。南北方向は3石、東西方向も3石検出したが、それぞれ南方向、西方向に礎石列が伸びるものと考えられる。また、礎石と石垣面の間、及び礎石の間には東柱の礎石が設置されている。東石には、長さ30～45cm、幅25～30cmを測る扁平な角石又は割石を用いている。東石の一部には、瓦を10～15cmの厚さに敷いて根締めとして用いているものもある。

北側の東西方向の礎石列標高は、25.1～25.2cmを測り、南側の東西方向の礎石列標高も24.7～24.9cmを測り、ほぼ一定している。南北方向の礎石列標高は、東側が高く、その比高差は、約30cmを測る。東柱の高さで床の水平を調節したのであろうか。

礎石にはB1・B3礎石のように二重に重ねられた礎石もある。B1a礎石は高さから他所から移動しているものと判断できる。二重になっているB3a・B3bのB3a礎石は高さ調整のためと考えられる。また、26ページ（礎石B1b～E1）の写真の様に東柱礎石や主柱礎石の内、底面に瓦や漆喰が挟まったものが存在する。礎石B2や東柱礎石D2の底面には瓦片が挟まったり、敷かれたりしている。建物の建替えの際に基礎部分に手が加えられた結果と判断したい。

東側南北方向の礎石間には、やや扁平な割石の小口を内側に揃えた高さ30cmの基壇状の積み石が存在する。

遺物については、裏込め石及び基盤面の黄褐色粘質土上面から多量の瓦片、漆喰片を検出した。その他の遺物には、硯が一点出土したが、現在のところ所在不明である。

(3) 調査第2区（トレンチ）の遺構

調査第1区において礎石列を検出したが、今回移築復元することとなった大正寺観音堂の建物と明治時代に撮影された祈念槽写真と比較すると建物規模に大きな相違があることからトレンチを設定して東西方向礎石の延長について、その有無確認を行った。トレンチの規模は、東西約140cm、南北70cm～140cm、深さ約60cmである。トレンチ内から長軸を南北方向にとった長方形切石の礎石を確認した。石材は不明である。

(4) 礎石の配置

礎石B1は2石が重なっているが、B1aは不自然な位置にあって、高さが異常であることから後世の移動と考えられる。東西方向の礎石B1b・B2・B3の間は、長さ約360cm、それぞれの礎石間は190cmで、約6尺を測る。B3と第2調査区の礎石B4との礎石間の間隔も同様である。

東側の南北方向列礎石のB1b・D1・E1間の長さは約265cmを測り、礎石間は、礎石の中心



裏込石及び瓦の散布状態（南から）



裏込石及び瓦の散布状態（西から）

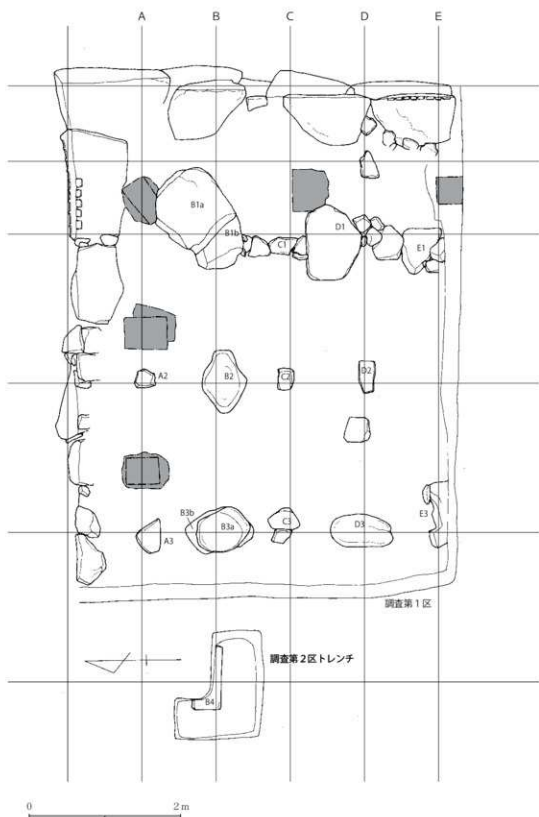


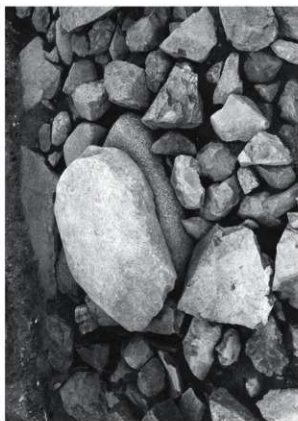
Fig.10 調査第1・2区礎石配置図 (縮尺1/50)



基石上の礎石状態 (西から)



東下の土による根締め状態 (南から)



重ねた礎石の状態 (東から)



礎石下の礎及び瓦片の状態 (南から)



版築面上の軒瓦出土状態（西から）



版築面上の瓦類出土状態（西から）



版築面上の軒瓦出土状態（西から）



礎の出土状態

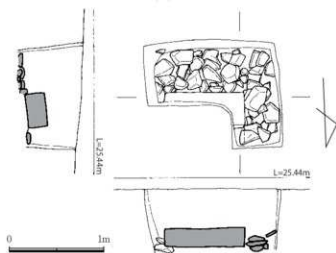


Fig.11 調査第2区遺構平面・断面図 (縮尺1/40)

で測った場合は、その間隔は均等には成らないが、西側の南北方向列礎石のB3a・D3の間隔は約6尺、D3とE4の間隔は約3尺であるから、東側の南北方向列の礎石B1b、D1、E1も同様な柱間隔と考えられる。礎石D1は中心線に乗っておらず、又、一段低いことから上部に一石が有ったと考えられる。

また、東柱又は、間柱の礎石と考えられるものにA列のA2・A3、C列のC1～C3列及び、D列のD2礎石がある。長さ25cm～45cmを測る板状の石を用いているが、東西方向の礎石間隔は、約



第2区(トレンチ)の遺構(西から)

6尺、南北方向も、約3尺を測り、規格の統一性が見られる。

B1b・C1・D1・E1の礎石列東側にも東柱の礎石と考えられる石列が在った可能性があるが、公園整備により裏込め石が動いており、定かではない。A2・A3列と北側天端石の面からとの間隔が約3尺であることを考慮すれば、B1b・C1・D1・E1礎石列の東側に東柱礎石が存在した事は十分に考えられる。

残念ながら祈念槽本来の建物規模が不明な状況では、これらの礎石配置をもってして基礎構造に言及することは不可能である。

3. 遺物説明

遺物は、盛土層や裏込め内から出土した。盛土の中から近世の瓦類や近代・近世陶磁器を多量に検出した。版築面の上面の壁土、及び漆喰崩落層からは近世の瓦類を、裏込め内からは名島城から持ち込まれたと思われる瓦類を検出した。

礎石列の年代を知る手がかりとして礎石や東石の下に根締めとして用いられた瓦があるので、詳細分析によっては、折念櫓建て替え時期を、知る事が可能である。

(1) 瓦類

出土した瓦類は、平瓦、丸瓦が多数を占めているが、その他に軒丸瓦、軒平瓦、鳥衾瓦、道具瓦、鬼瓦がある。軒平瓦には滴水瓦と称されている一群もある。

軒丸瓦 (Fig12-1～14, Fig13-15～18) 1～7・9・10は、瓦当内区に文様が巴文で、10が右巻き、その他は左巻きである。3・4・6・7・9は、頭部の巻き込みが強く、特に3・6・7は特徴的である。1・2・3・6の尾は隣の尾に接しないが、4・7・8・10は尾が隣の尾に接するほど近接する。1・3・5・6は、12個の珠文を持ち、2は10個、4は9個である。1・3の瓦当径は14cm、6・12は大型の軒丸瓦で、瓦当径は17.5cmを測る。

13～15は瓦当面に黒田家の家紋である藤巴文を配する。14は糸島市桜井神社表採品である。13の藤花の花弁を細かく描写しているが、14・15は、花弁を簡略化している。13の瓦当径は15cmを測る。18は、瓦当内区に桐文を配している。月見槽から五七の桐文瓦が出土しているのも、同型品と考えられる。名島城からの搬入品であろう。16・17は黒田家の家紋である黒餅文を瓦当内区に配している。(Fig14-34)は、軒丸瓦の丸瓦部と瓦当接合部の拓本である。斜め方向の刻みを入れている。

鳥衾瓦 (Fig12-11) 瓦当内区に巴文を配している。頭は大きく、左回りである。尾は隣の尾に接している。珠文は13個である。

軒平瓦 (Fig13-19～31) 19・20は、いわゆる「滴水瓦」と云われるもので、瓦当面と平瓦接合部分の角度が鈍角である。中心飾りは桐文と考えられ、左右に二回転する幅の大きい唐草文を配している。福岡城月見槽跡から同型と思われる五七桐文の軒平瓦が出土している。これらの瓦も名島城から持ち込まれたものと考えられる。21・22の瓦当幅は小さい。21～23の中心飾りは、宝珠文と考えられ、左右には唐草文を配置する。21は長い主葉の唐草文を三回転させ、前後に子葉を添えている。22の唐草文は、連続して三回転する主葉の上下に切れ切れに子葉を配している。23は、釣り針状の唐草文を三回転させている。24・25・28・29は、大型の軒平瓦であるが、24・25・28の中心飾りは不明。瓦当内区に左右に配置した唐草文は、先端を大きく巻き込んでいる。25の唐草文は、主葉の前後に子葉が派生している。28は、二回転する唐草文を配している。29は、瓦当内区に雲文を配するもので、同じ例は大宰府観世音寺などでも出土している。福岡城跡内では極めて出土例が少ない。26・27の中心飾りは、三葉文で、26は、先端を大きく巻き込んだ唐草文を二回転させる。27の唐草文は、釣り針状で、三回転させる。中心飾りから派生した唐草文の下部に珠文が1個ある。30は、瓦当内区に唐草文を配置し、外区袖に「今宿三右衛門」の刻印がある。31の瓦当内区には藤花文を唐草状に配置している。外区袖の刻印は「今宿三右衛門」である。

瓦当接合部拓本 (Fig14-32・33) 32・33は、軒平瓦の瓦当と平瓦の接合面の拓本である。平瓦の瓦当接合部分に並行状、もしくは斜格子状にヘラ刻みを行っている。

丸瓦 (Fig15-1～4, Fig16-6) 大量の丸瓦片が出土したが、図示できるものは少ない。Fig16-

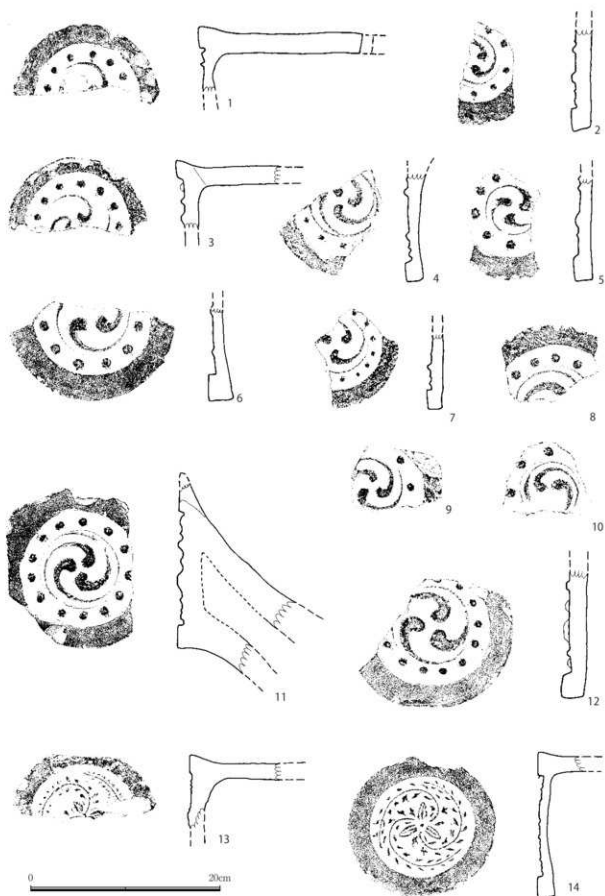


Fig.12 瓦類実測図1 (縮尺1/4)

(原井神社表様品)

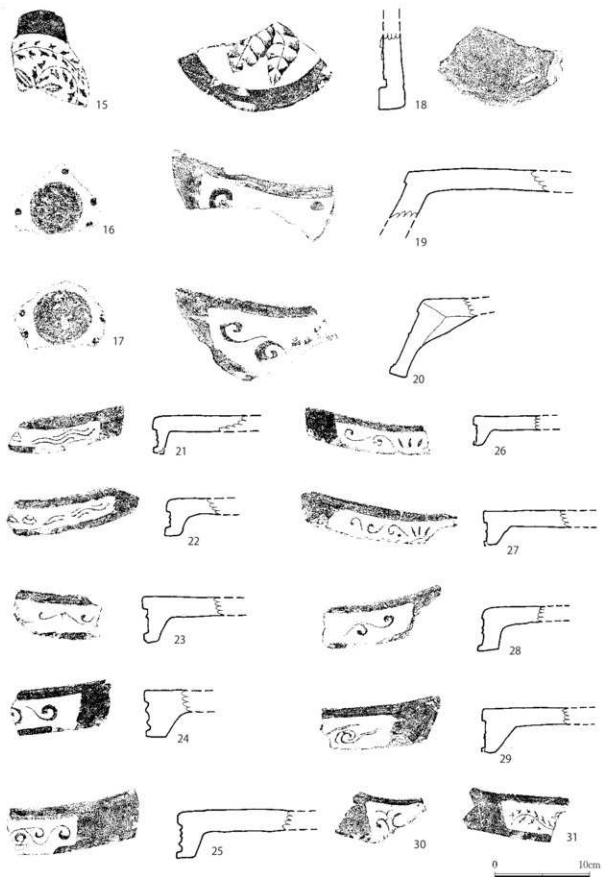


Fig.13 瓦類実測図2 (縮尺1/4)

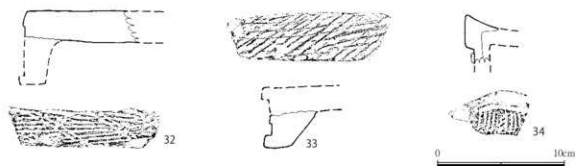


Fig.14 瓦類実測図3 (縮尺1/3)

6は筒部尻端部を欠いている。現存長20cm、幅16.6cm、高さ4.5cm、玉縁長4cmを測る。背部はタテ方向のヘラナデを施している。谷部にはコビキBの痕跡と吊り縄痕がある。背部の玉縁近くに「一文字」のヘラ記号がある。1は、破片であるが、玉縁の長さ4cmを測る。背部はタテ方向のヘラナデ調整を施し、谷にはコビキAの痕跡がある。谷には網代痕が遺る。背には「立鼓文」の刻印がある。2は、長さ2.2cmの小さな玉縁をもつ。背には丁寧なタテ方向のヘラナデを施し、「二文字」のヘラ記号がある。谷には網代痕と吊り縄痕がある。3は、玉縁の長さ3.4cmを測る。背には丸みをもった大きな格子状の叩きがある。4の背には、格子目叩きがあり、谷には布目と吊り縄痕がある。

道具瓦 (Fig15-5) 5は、タテ方向に割れて、一部を欠いている。全長17.6cmを測る。玉縁は無く、前端部尻のヘラケズリも無い。側面をナナメに削り取っている。背部はタテ方向のナデ、谷部にはコビキBの痕跡と網目痕が遺る。

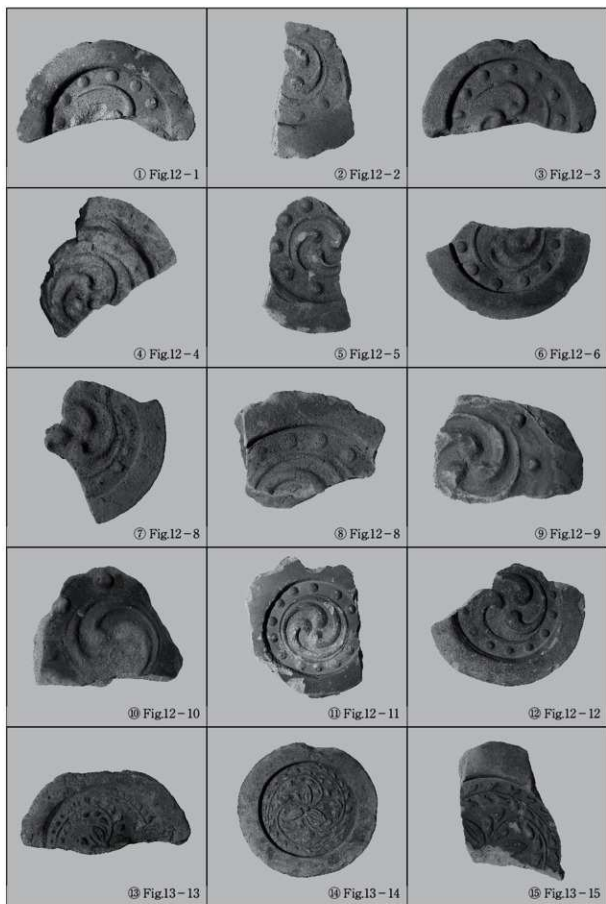
鬼瓦 (P38) 破片を検出したが図示できるものはない。P38-⑪の写真は鬼瓦の鼻部分である。どっしりと構えた鼻である。全体にマメツしている。P38の①・②は、現在の折念槽の棟先に飾られている鬼瓦である。角を高く突き上げ、両側の鱗には同心円文を配置して、鱗の先端は大きく巻き込んでいる。側面には「文禄四〇〇年 (1595)」の銘がヘラ書きされている。これも名島城からの持ち込みと考えられる。筥崎宮所蔵の「文禄四年」「林初左衛門」銘の鬼瓦形状が極めて近似しているので、同じ製作者の可能性もある。又、一尺、南東隅の鬼瓦には「文政七年十一月 博多瓦師正木喜平作」の銘があると云われる。

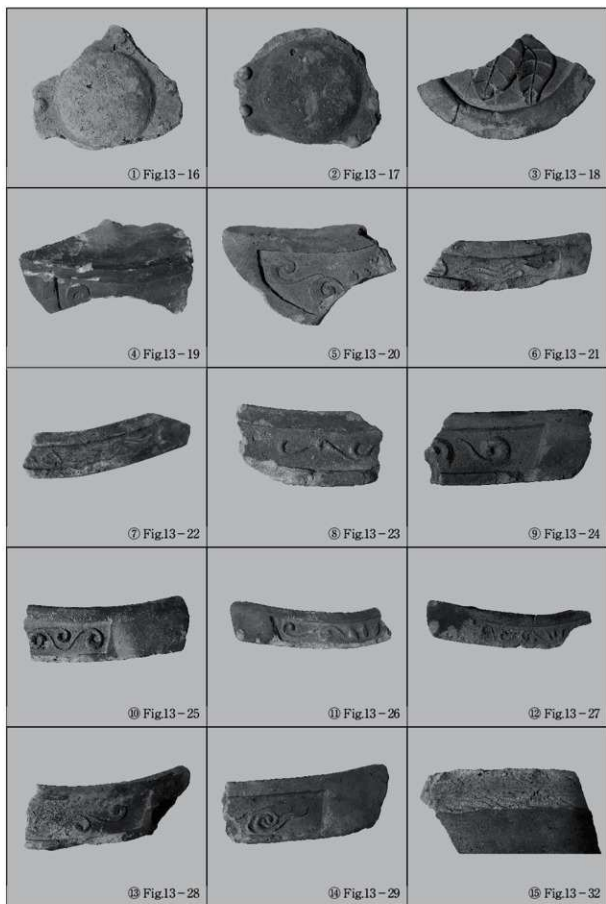
(2) 瓦工人刻印・記号刻印・ヘラ記号

瓦工人・瓦師名刻印 (Fig18-1~16) 1~15は瓦工人・瓦師名で、16は屋号を示すものと考えられる。1は「一郎右衛門」、2は「九郎左衛門」、3は、「□□□門」、4は、「新三郎次」、5・6は、「□□衛」、7は、「伊兵衛次」、8~10は「今宿又一」、11~16は「今宿三右衛門」である。

1~7は、草書体もしくは行書体であるが、8~10は楷書体で、10は長方形の枠を持っている。11~16は、草書体ではあるが、長方形の枠を有しており、その枠も細いため鉄製の印判の可能性はある。厳密に言えば1~7は個人を示す瓦師や瓦工人の名前であるが、8~16はブランド化した商標名を示していることも考えられる。

記号刻印 (Fig18-18~42, Fig19-43~72) 17~19は、菊花文で、18~20は、菊花文の下に一文字が引かれる。花卉は、17が7弁で、その他は8弁である。20~24の八弁菊花文には、花卉の区





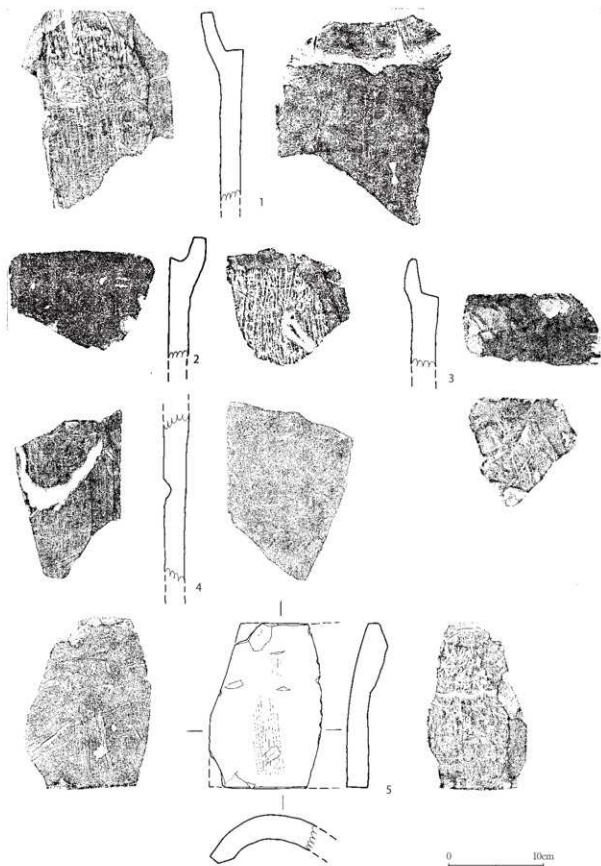


Fig.15 瓦類実測図4 (縮尺1/4)

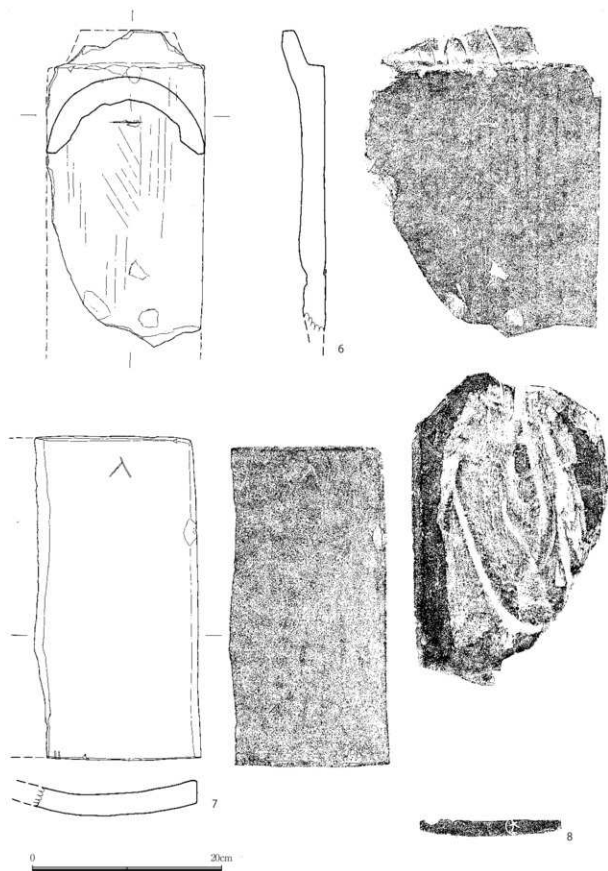


Fig.16 瓦類実測図5 (縮尺1/4)

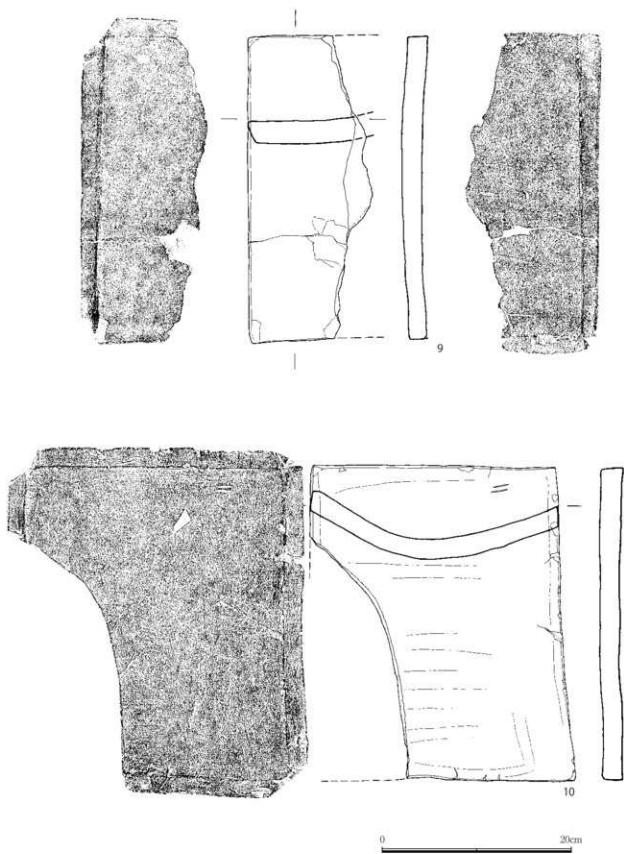


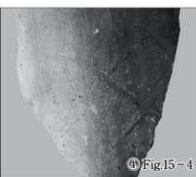
Fig.17 瓦類実測図6 (縮尺1/4)



①大棟隅鬼瓦



③ Fig.14-34



④ Fig.15-4



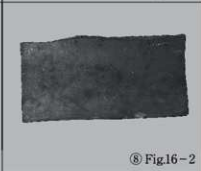
⑤ Fig.15-5



⑥ Fig.16-1 ウラ



⑦ Fig.16-1



⑧ Fig.16-2



⑨ Fig.17-1



⑩ Fig.17-2



⑪鬼瓦

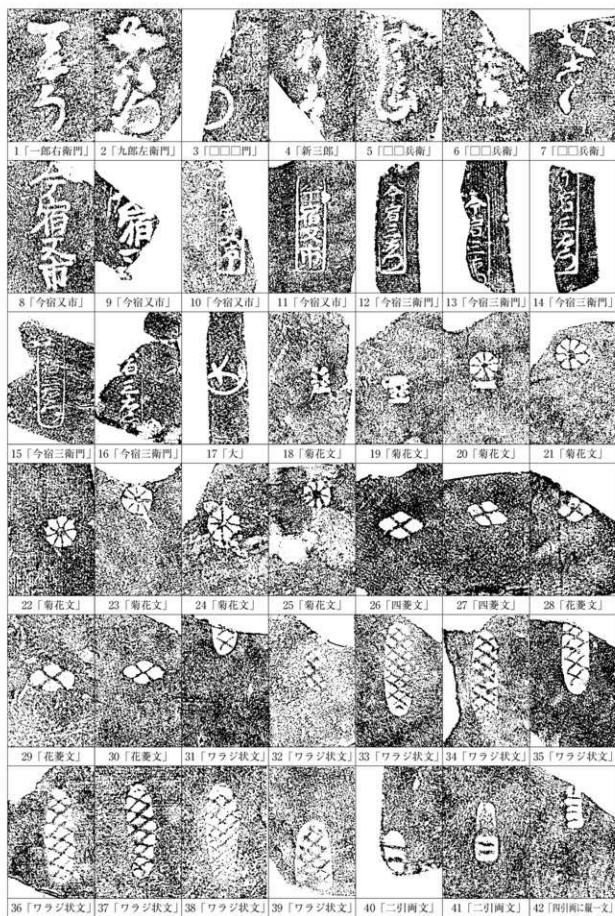


Fig.18 瓦刺印拓本1 (縮尺2/3)

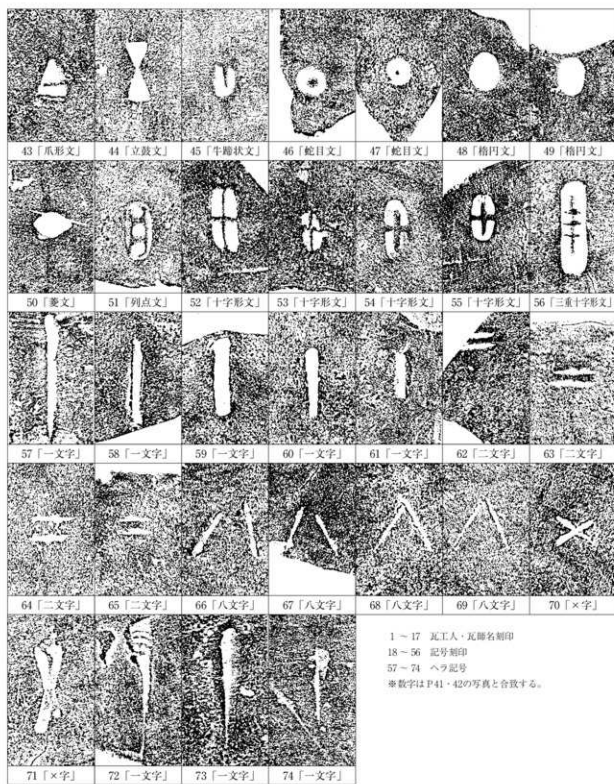
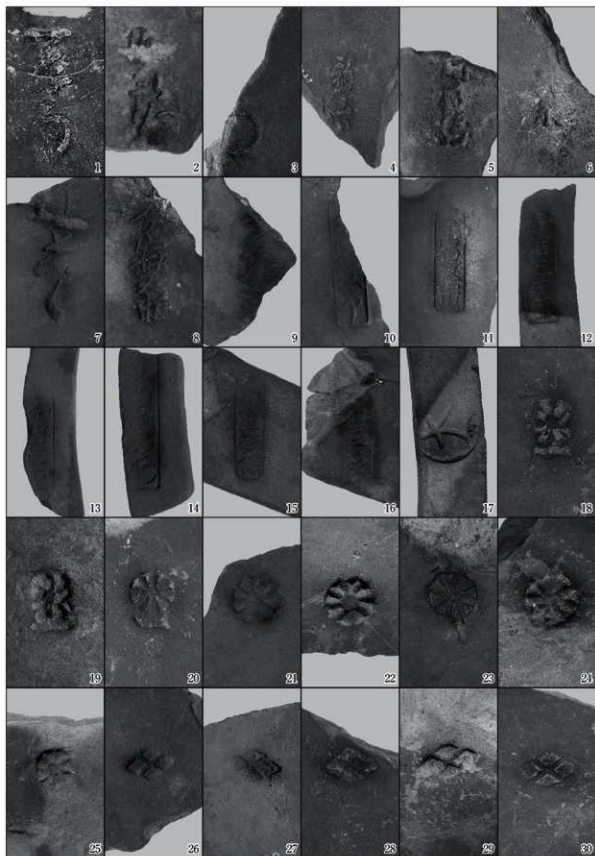
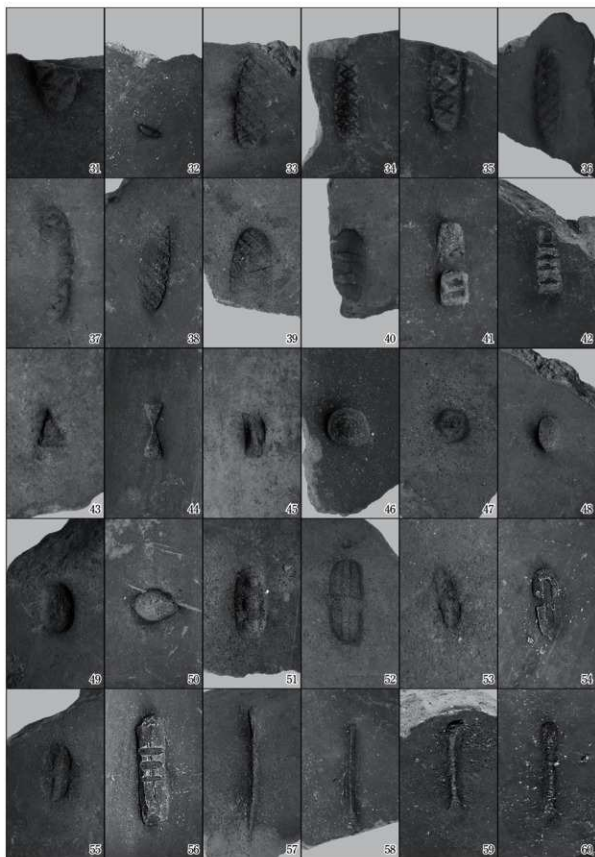
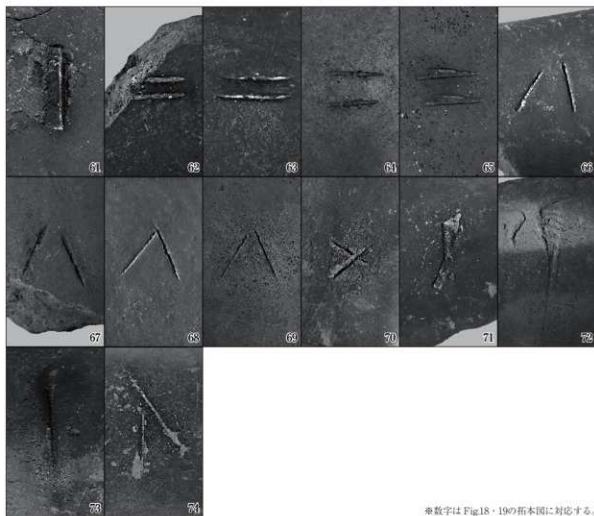


Fig.19 瓦刺印拓本2 (縮尺2/3)





※数字は Fig.18・19の拓本図に対応する。



※数字はFig.18・19の拓本図に対応する。

切り方や大きさに相違が見られる。25～30は、四菱文であるが、25～27は武田菱文、28～30は菱の角が丸くなっていることから花菱の一種と考えられる。大きさから更に数種に分けることができる。31～39は、楕円形に斜格子文を刻んだもので、一見、ワラジ状を呈している。大きさや格子の数に違いがあり、7～8種に分類できる。40は、楕円形内に二条線をいれたもの、41は、二つの楕円形を重ね、小さい楕円に二条線をいれた二引両文、42は、楕円形内に四条ヨコ線と一条のタテ線をいれたもの、43は、三角形を呈した爪形文、44は立鼓文、45は牛蹄状文、46・47は蛇の目文、48・49は楕円文、50は菱文、51は、楕円形内に列点文をいれたもの、52～55は、楕円形内に十字形文を施し、56は隅丸長方形の枠内に三重の十字形文を施している。

ヘラ記号 (Fig.19-57～72) 57～61は「一文字」、62～65は「二文字」、66～69は「八文字」、70・71は「×文字」である。その他に「三文字」があるが図示できなかった。「二文字」「八文字」のヘラ刻みは、鋭く、深い。72は製作時のヘラ疵の可能性はある。

Tab. 3 祈念槽出土瓦計測表

祈念槽跡出土軒平瓦・平瓦一覽

挿図 番号	遺物 番号	瓦種類	長さ	幅 伏槽 広端	中心 飾り	瓦当面		内区 幅	内区 径	コピキ	背部調整	谷部調整	備考
						横幅 縦幅	横幅 縦幅						
Fig13	19	軒平瓦	-	-	桐文*						タテナデ	ヨコナデ	滴水瓦
Fig13	20	軒平瓦	-	-	桐文*						タテナデ	ヨコナデ	滴水瓦
Fig13	21	軒平瓦	-	-	宝珠文	約23 34	18 18				マメツ	マメツ	
Fig13	22	軒平瓦	-	-	宝珠文	約24 38	186 20				マメツ	マメツ	
Fig13	23	軒平瓦	-	-	-	46	25				ヨコナデ	離れ砂付着	
Fig13	24	軒平瓦	-	-	-	50	30				ヨコナデ	離れ砂付着	
Fig13	25	軒平瓦	-	-	-	46	29				ヨコナデ	タテ・ヨコナデ	
Fig13	26	軒平瓦	-	-	三葉文	約24 31	約16 18				ヨコナデ	マメツ	
Fig13	27	軒平瓦	-	-	三葉文	約26 35	約166 22				タテナデ	ハラヨコナデ	
Fig13	28	軒平瓦	-	-	-	45	36						
Fig13	29	軒平瓦	-	-	雲文	45	28				マメツ	タテナデ	
Fig13	30	軒平瓦	-	-	-	46	34				ヨコ・タテナデ	離れ砂付着	外区袖に「今宿三右衛門」刷印
Fig13	31	軒平瓦	-	-	華文	46	29				タテナデ	離れ砂付着	外区袖に「今宿三右衛門」刷印
Fig16	7	平瓦	338	-	-						タテ・ナナメナデ	ヨコナデ	谷部に「八文字」ヘア描き
Fig17	8	平瓦	325	26	-						タテ・ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig17	9	平瓦	332	26	-						タテナデ	タテ・ヨコナデ	谷部に「二文字」ヘア描き

祈念槽跡出土軒丸瓦・丸瓦一覽

挿図 番号	遺物 番号	瓦種類	長さ(cm) 玉縁長さ	幅 (cm)	中心 飾り	瓦当 面径	内区 径	コピキ	背部調整	谷部調整	備考	
												Fig12
Fig12	2	軒丸瓦	-	-	巴文	-	8					
Fig12	3	軒丸瓦	-	-	巴文	145	102	B	マメツ	マメツ		
Fig12	4	軒丸瓦	-	-	巴文	-	104					
Fig12	5	軒丸瓦	-	-	巴文	-	94					
Fig12	6	軒丸瓦	-	-	巴文	174	12					
Fig12	7	軒丸瓦	-	-	巴文	-	88		マメツ	マメツ		
Fig12	8	軒丸瓦	-	-	巴文	-						
Fig12	9	軒丸瓦	-	-	巴文	-	10		マメツ	マメツ		
Fig12	10	軒丸瓦	-	-	巴文	-	104		マメツ	マメツ		
Fig12	11	軒丸瓦	-	-	巴文	182	12		ハラタテナデ	袋部に指頭圧痕		
Fig12	12	軒丸瓦	-	-	巴文	175	116					
Fig12	13	軒丸瓦	-	-	藤巴文	152	108	B	マメツ	網目痕		
Fig12	14	軒丸瓦	-	-	藤巴文	156	11				参考品「桜井神社表採品」	
Fig13	15	軒丸瓦	-	-	藤巴文	-	114					
Fig13	16	軒丸瓦	-	-	黒餅文	-	10?		マメツ	マメツ		
Fig13	17	軒丸瓦	-	-	黒餅文	-	10?		マメツ	マメツ		
Fig13	18	軒丸瓦	-	-	桐文	-	-					
Fig15	1	丸瓦	現存長 20cm	-	-				B	ハラタテナデ	網目痕	背部に「立敷文」刷印
Fig15	2	丸瓦	-	-	-				B	叩き痕	網目痕・吊り縄痕	背部に「二文字」
Fig15	3	丸瓦	-	-	-				A	ハラタテナデ	網目痕	背部に「三文字」
Fig15	4	丸瓦	-	-	-				B	斜格子叩き痕	網目痕・吊り縄痕	
Fig15	5	伏間瓦	176	-	-				B	タテナデ	網目痕	道具瓦
Fig15	6	丸瓦	-	-	-				B	ヨコ・タテナデ	網目痕・吊り縄痕	

Tab. 4 祈念槽跡出土刻印瓦一覽

碑図番号	遺物番号	刻印名称	特 徴	瓦種類	部 位	造 構 名	実測番号	備 考
Fig.18	1	一郎右衛門	草書体	丸瓦	背	裏込め上面	71	
Fig.18	2	九郎左衛門	草書体	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	51	
Fig.18	3	□□□門	草書体	平瓦	谷	近代客土	106	人名
Fig.18	4	新三郎	草書体	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	26	
Fig.18	5	□□兵衛	草書体	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	38	「弥兵衛」カ
Fig.18	6	□□兵衛	草書体	平瓦	谷	床面直上	91	「惣兵衛」カ
Fig.18	7	□□兵衛	草書体	丸瓦	背	近代客土	104	「伊兵衛」カ
Fig.18	8	今宿又市	行書体	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	11	
Fig.18	9	今宿又市	楷書体	丸瓦	背	床面直上	88	「今宿又市」カ
Fig.18	10	今宿又市	楷書体	丸瓦	背	近代客土	103	長方形枠付
Fig.18	11	今宿又市	楷書体	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	39	長方形枠付
Fig.18	12	今宿三衛門	草書体	平瓦	小口	版築上面瓦礫第一層	31	長方形枠付
Fig.18	13	今宿三衛門	草書体	平瓦	小口	版築上面瓦礫第一層	32	長方形枠付
Fig.18	14	今宿三衛門	草書体	平瓦	小口	版築上面瓦礫第一層	33	長方形枠付
Fig.18	15	今宿三衛門	草書体	軒平瓦	瓦当	版築上面瓦礫第一層	43	長方形枠付
Fig.18	16	今宿三衛門	草書体	軒平瓦	瓦当	近代客土	101	長方形枠付
Fig.18	17	大	丸枠内	平瓦	小口	近代客土	102	丸枠付
Fig.18	18	菊花文	八弁菊花文に一文字	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	40	
Fig.18	19	菊花文	菊花文に一文字	丸瓦	背	近代客土	109	
Fig.18	20	菊花文	八弁菊花文に一文字	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	23	
Fig.18	21	菊花文	八弁菊花文	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	21	
Fig.18	22	菊花文	八弁菊花文	丸瓦	背	床面直上	2	
Fig.18	23	菊花文	八弁菊花文	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	22	
Fig.18	24	菊花文	八弁菊花文	丸瓦	背	床面直上	86	
Fig.18	25	菊花文	八弁菊花文	丸瓦	背	近代客土	110	
Fig.18	26	四葉文	武田葉文	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	14	
Fig.18	27	四葉文	武田葉文	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	15	
Fig.18	28	四葉文	武田葉文	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	34	
Fig.18	29	花菱文		丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	36	
Fig.18	30	花菱文		丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	37	
Fig.18	31	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	13	大部分を欠損
Fig.18	32	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	41	一部を欠損
Fig.18	33	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	12	
Fig.18	34	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	29	
Fig.18	35	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	30	一部を欠損
Fig.18	36	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	平瓦	谷	版築上	62	
Fig.18	37	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	平瓦	谷	床面直上	87	
Fig.18	38	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	平瓦	谷	床面直上	92	
Fig.18	39	ワラジ状文	長楕円枠に斜格子文	平瓦	谷	近代客土	105	一部欠損

挿図番号	遺物番号	刻印名称	特 徴	瓦種類	部 位	造 構 名	実測番号	備 考
Fig.18	40	二引両文	楕円形に爪形状の二本線	丸瓦	背	東石下	132	
Fig.18	41	二引両文	四角形に二引両	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	44	
Fig.18	42	四引両に縦一文	長方形にタテ一本、ヨコ三本	平瓦	谷	床面直上	85	
Fig.19	43	爪形文	三角文に一文字	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	25	
Fig.19	44	立鼓文		丸瓦	背	床面直上	81	
Fig.19	45	牛蹄状文		丸瓦	背	版築上面瓦礫第二層	45	
Fig.19	46	蛇目文		平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	27	
Fig.19	47	蛇目文		平瓦	谷	近代客土	107	
Fig.19	48	楕円文		平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	28	
Fig.19	49	楕円文		丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	17	
Fig.19	50	菱文		丸瓦	背	近代客土	108	
Fig.19	51	列点文	楕円形枠に列点文	平瓦	谷	版築上面瓦礫第一層	133	
Fig.19	52	十字形文	楕円形に十字形文	平瓦	谷	裏込め上	72	
Fig.19	53	十字形文	楕円形に十字形文	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	42	
Fig.19	54	十字形文	楕円形に十字形文	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	18	
Fig.19	55	十字形文	楕円形に十字紋	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	19	
Fig.19	56	三重十字形文	長方形に三重の十字形文	丸瓦	背	版築上	61	
Fig.19	57	一文字	鹿描き	平瓦	背	床面直上	90	疵?
Fig.19	58	一文字	鹿描き	丸瓦	背	礎石西側	121	
Fig.19	59	一文字	鹿描き	平瓦	谷	床面直上	82	
Fig.19	60	一文字	鹿描き	平瓦	谷	床面直上	83	
Fig.19	61	一文字	鹿描き	軒丸瓦	瓦当裏	地表面	1	瓦当文様：木葉文
Fig.19	-	一文字	鹿描き	平瓦	背	床面直上	84	疵?
Fig.19	-	一文字	鹿描き	平瓦	背	床面直上	94	疵?
Fig.19	-	一文字	鹿描き	平瓦	背	床面直上	84	疵?
Fig.19	62	二文字	鹿描き	平瓦	背	床面直上	95	
Fig.19	63	二文字	鹿描き	平瓦	谷	地山上面	1125	
Fig.19	64	二文字	鹿描き	平瓦	背	近代客土	1128	
Fig.19	65	二文字	鹿描き	丸瓦	背	版築上面	1131	
Fig.19	-	三文字	鹿描き	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	20	拓本無し
Fig.19	66	八文字	鹿描き	平瓦	背	版築上面瓦礫第一層	24	
Fig.19	67	八文字	鹿描き	丸瓦	背	版築上	63	
Fig.19	68	八文字	鹿描き	平瓦	谷	床面直上	89	
Fig.19	69	八文字	鹿描き	平瓦	谷	床面直上	93	
Fig.19	70	×印	鹿描き	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	16	
Fig.19	71	×印	鹿描き	丸瓦	背	版築上面瓦礫第一層	35	
Fig.19	72	一文字	鹿描き	平瓦	谷	床面直上	84	製作時の疵か
Fig.19	73	一文字	鹿描き	平瓦	谷	床面直上	94	

第4章 まとめ

昭和59年の春に発掘調査を行って以来、調査報告書を刊行するに至るまで30年を経過した。予算化されなかったことが大きな理由ではあるが、福岡市の文化財保護行政において近世遺跡に対する認識や評価が低いことも一因している。故に今回の発掘調査についても、祈念槽についての図面・写真などの記録類が遺されていない状況の中で、充分な事前協議や調査方法などの検討がなされないまま「移築復元ありき」の姿勢で実施された。そのため調査範囲が大正寺観音堂建物の規模範囲に限定され、祈念槽跡或いは祈念槽構造の実態に迫る調査が行なわれたとは言い難く、今にして忸怩たる想いである。すなわち祈念槽の規模・構造及び槽台の状況を考古学的・建築学的に調査することを目的としたものではなく、第一義的には北九州所在の大正寺観音堂を移築復元するための方策のひとつに過ぎなかった。

また、当時の文化財保護行政の社会的背景において開発に伴う緊急調査を優先せざるを得ず、保護対象範疇においても原始～古代までの考古学的偏重が流れてもおり、そのため中世・近世の文化財調査への対処方策や、建築学・土学的な総合的な調査の方向性が見出されていなかったことも災いして移築復元の在り方や発掘調査の目的・手法を曖昧なまま実施したことが中途半端な結果を生むことになってしまった。

移築復元に関して言えば、復元を担当した財団法人文化財建造物保存技術協会担当者も、祈念槽の規模が矮小化していることや部材の新材への変更やその新材が電動鋸による製材であることも認識されており、発掘調査で検出した祈念槽礎石と観音堂主柱の位置が合致しないことも想定されていた。そのため矮小化した復元祈念槽が単体では風雪に耐えられないことも考えられ、発掘調査により検出した礎石の配置次第で復元建物の基礎構造や固定方法を検討したい意向であった。発掘調査で検出した礎石列は、当然、矮小化した観音堂（祈念槽）の柱位置と合致するものではないため、結果的には一部の基礎を用いながらも、アンカーを石垣天端石に打ち込む事で固定する方法が選択されたのである。

発掘調査の成果については、江戸時代祈念槽の礎石群の一部を検出したに過ぎないが、礎石が東西南北方向に6尺間隔で配置されていること、東柱の礎石も、主柱礎石の半分の3尺間隔で配置されていることが判明した。

また、礎石には高さを調整するためなのかB3礎石のように二重に重ねられた礎石もある。また、礎石B2や東柱礎石D2の下位には瓦片が挟まったり、敷かれたりしていることから、建物の建替えの際に基礎部分に手が増えられたことも把握する事ができた。

瓦工人刻印・記号刻印・ヘラ記号については、記号刻印は単独で施されることが多く、大宰府史跡観世音寺出土品の中には、組み合わせも存在する。但し記号刻印が瓦工人・瓦師名の刻印と組み合わせられて使用されることはなく、瓦工人名刻印に先行する記号刻印である。これらの記号刻印が瓦師・瓦工人の個々を示すものであるのか、現状では不明であるが、福岡城築城当時の瓦師の身分は不明瞭で、特に福岡藩の場合は「筑前續風土記」や「筑前續風土記拾遺」等よれば土分に位置づけられていることからこれらの記号は窯元を示す可能性がある。瓦に施されたヘラ記号についてはこれまで注目されておらず、ヘラ記号の持つ意味も現状では不明である。

福岡城の瓦や刻印については、まだ調査研究の端緒にある。今後の資料増加を待ちたい。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくおかじょうきねんやぐらあと							
書名	福岡城祈念槽跡							
副書名	福岡城跡題次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1247集							
編著者名	井澤洋一							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目1-8							
発行年月日	2014年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふくおかじょうきねんやぐらあと 福岡城祈念槽跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 ちゅうおうくわい 中央区城内	40132	0193	33° 21' 20"	130° 50' 08"	19840201 ～ 19840326	36	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
福岡城祈念槽跡	城郭	近世		祈念槽跡		瓦類・陶磁器・硯		槽礎石の一部を検出
要 約	<p>昭和32年8月13日に福岡県の有形（建造物）文化財に指定された北九州市所在の大正寺観音堂（福岡城祈念槽）建物は、大正7年に払い下げられた祈念槽建物であるが、昭和57年度に福岡市は、大正寺観音堂（祈念槽）を買い戻し、昭和59年度に原位置に移築復元工事が実施されることとなった。</p> <p>発掘調査は、槽合全体を調査対象とするものではなく、規模が球小化した大正寺観音堂建物の規模に合わせた面積を調査対象としたため、江戸時代当時の祈念槽規模や基礎構造を知る事はできなかった。</p> <p>発掘調査では、槽合の埋没状況や建物礎石の遺存状態、及び立替が行われた痕跡を確認する事ができた他、築城時期の瓦類を検出した。</p>							

<p>福岡城祈念槽跡</p> <p>— 福岡城跡第6次調査報告 —</p> <p>福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1247集</p> <p>2014年（平成26年）3月24日発行</p> <p>編集・発行 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1丁目8-1</p> <p>印刷 田堀印刷株式会社</p>
